

「投稿論文の書式、注、参考文献について(内規)」

(英語学論文用)

平成29年1月1日施行

1. 書式、字体、枚数など

- ・ 投稿原稿はA4用紙横書き、MS Wordで、字体は本文・注のいずれにおいても、和文をMS明朝、英文をCenturyとして下さい。
- ・ 英数字、マルカッコ、コンマ、コロン、セミコロン、ピリオドは半角文字をお使い下さい。(なお、一重カギカッコ(「 」)、二重カギカッコ(『 』)、ヤマカッコ(〈 〉)は全角文字をお使い下さい。)
- ・ コンマ、コロン、セミコロンの後には半角1文字分のスペースを空けて下さい。また、文末のピリオドの後には半角2文字分のスペースを空けて次の英文を始めて下さい。
- ・ カッコの前後には基本的にスペースを入れる必要はありません。また、欧文と和文の境目も同様にスペースを入れる必要はありません。但し、地の文及び参考文献表で文献に言及する際は、年号を示すカッコの前に半角1字分のスペースを入れて下さい。(例えば、地の文では、「鈴木□(2008)では、...」のように、また、参考文献の箇所については、「鈴木繁幸□(2008)「英字新聞ヘッドラインで使用されるレトリックについて—スポーツ欄を考える」『日本英語英文学』第18号、17-28.」のようになります。下記、「2. 注、参考文献など」もご参照下さい。)
- ・ 各節、注、参考文献の前後は1行空けて下さい。
- ・ 例文の前後は1行空けて下さい。
- ・ 注は、日本語論文の場合、句読点の後に、「...と考えられる。¹しかし、Chomsky (1986)では、²...」のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとして下さい。英語論文の場合、punctuationの後に、“... is discussed in Chomsky (1986),¹ but here I will claim that IP is a barrier as well.”²のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとして下さい。
- ・ 「はじめに」あるいは「序論」は(0節からではなく)「1. はじめに」のように、1節から始めて下さい。
- ・ 小節番号は、「3.1. 代案」のように、数字の後にピリオドを置いて下さい。

2. 注、参考文献など

- ・ 注は参考文献の前にまとめて載せて下さい(脚注形式ではなく尾注形式として下さい)。
- ・ 参考文献(引用文献や参考文献とはせず)は本文中で引用したもののみをお載せ下さい。
- ・ 英語の文献、日本語の文献を混在させてアルファベット順に並べて下さい(別々に分けないうで下さい)。

- ・ 同一著者名の場合でも「... (2005)『ロックを「読む」』東京: 弦書房.」などとせず、「植村 洋 (2005)『ロックを「読む」』東京: 弦書房.」のように著者名を繰り返して下さい。
- ・ 共著者の場合、英語は&ではなくand、日本語は中黒点(・)をそれぞれ使用して下さい。
- ・ 雑誌については日英語を問わず、巻数、号数、ページ数を明記して下さい。

3. 注と参照文献の例

以下、注と参照文献の例を示しておきます。なお、文献例は日本語文献を中心に挙げてあります。

注

1. 伊勢村定雄(私信)によると、以下の例は.....。
2. 藤田 (2006)にも指摘されている通り、.....。
3. Kuno and Takami (1993)では(i)の反例として(ii)が挙げられている。
 - (i) *Pictures of himself_i don't portray John_i well.
 - (ii) To John's_i disgust, a story about himself_i in the Boston Globe portrayed him_i as a small-town politician. (Kuno and Takami 1993: 157)

参照文献

〈単著・編著〉

鈴木雅光 (2000) 『例外の文法』東京: 東京精文館.

Nomura, Tadao (2006) *ModalP and Subjunctive Present*. Tokyo: Hituzi Syobo.

永谷万里雄・清水和子・仙土真由美・松倉信幸・鈴木繁幸・木内 修編 (2006) 『言語と文学の饗宴: 岡田春馬先生帝京大学名誉教授就任記念論文集』東京: DTP出版.

Brinton, Laurel and Minoji Akimoto (eds.) (1999) *Collocational and Idiomatic Aspects of Composite Predicates in the History of English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

〈編著書収録論文〉

伊藤達也 (2010) 「不定名詞の作用域」藤田崇夫・鈴木繁幸・松倉信幸編『英語と英語教育の眺望』142-156. 東京: DTP出版.

Iwamoto, Noriko (2010) "The Use of Debate in English Writing Class." In Takao Fujita, Shigeyuki Suzuki, and Nobuyuki Matsukura (eds.) *The Future of English Studies*, 8-19. Tokyo: DTP Publishing.

〈学会誌論文〉

松倉信幸 (2007) 「英和辞典における感情を表す過去分詞形容詞の表記」『日本英語英文学』第

17号、17-26.

Shibuya, Kazuro (2008) "Changes of Motivational Intensity in Learning a Foreign Language—A Study of University Students in Japan." *Studies in English Linguistics and Literature* 18: 1-16.

〈大学紀要論文〉

藤田崇夫 (2003)「副詞化したalbeit」『浜松短期大学研究論集』第59号、247-256. 浜松短期大学.

〈月刊誌収録論文〉

野村忠央 (2004)「仮定法現在節における〈have・be+not〉語順再考」『英語青年』第149巻11号、694-696. 東京: 研究社.

中澤和夫 (1988)「述詞の位置の前置詞句(1)」(英文法研究の最前線39)『英語教育』6月号、70-72. 東京: 大修館.

〈学会等のプロシーディング〉

外池滋生 (2003)「係助詞に関するいくつかの推測—文中詞と文末詞の間で—」*KLS* 23: 252-260. 関西言語学会.

〈口頭発表〉

土居 峻 (2009)「ケンペル『日本誌』における日本語」日本英語英文学会第19回年次大会発表ハンドアウト.

〈書 評〉

野村忠央 (2004)「書評: 秋元実治著『文文化とイディオム化』東京 ひつじ書房 2002年 vi+267pp.」『近代英語研究』第20号、105-115.

4. 附則

この内規は2017年1月1日から運用し、*Fortuna* 第28号より適用する。

(付記)

この内規は日本英語英文学会(JAELL)の「投稿論文の書式、参照文献表、注について補足(内規)(英語学論文)」に概ね基づいております。転用を許可して下さいました同学会に御礼申し上げます。

(欧米言語文化学会編集委員会)